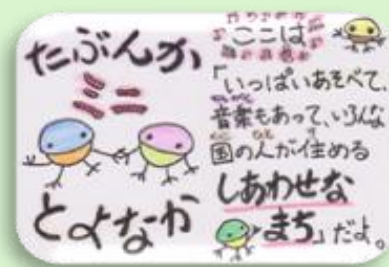


ジャンル	子ども・教育	日本語学習	医療・福祉	労働	災害対策	意識啓発 地域づくり	推進体制の 整備	その他
事業名	未来を拓く多文化子どもエンパワメントプロジェクト ～多文化な子どもがつくる子どもまち「たぶんかミニとよなか」～							
団体名	財団法人とよなか国際交流協会							

***** 事業のポイント *****

日本生まれや子ども時代に来日した多文化な背景をもつ「もと子ども」の若者たちが中心となって、多文化な子どもたちが生き生きと活躍できるようなプロジェクトを企画・実施した。そのひとつとして、外国にルーツをもつ子どもたちによる子どものまちづくり「たぶんかミニとよなか」を開催（豊中市国際教育推進協議会との共催）。「子ども会議」、本番のまちづくりの様子、子どもや学生ボランティアの感想を、写真をふんだんに使った冊子にまとめ、学校や子どもたちに発信している。



助成年度 区分	平成 22 年度域国際化協会等先導的施策支援事業	事業総額	1,989 千円
------------	--------------------------	------	----------

事業の内容、成果等

(1)背景

国際化が進行するなか、地域にも外国につながる子どもたちが多く暮らすようになっている。しかし、特に日本の学校生活においては、多文化な子どもたちが言語や文化を含めその背景を積極的に押し出すことのできる機会は少なく、子どもたちの多様で豊かな文化が不可視化、潜在化されやすい傾向にある。豊中市は一部の地域をのぞき外国人が散在して暮らす少数点在地域である。そうしたなかで、子どもたちが仲間と出会い・交流する機会はますます重要である。

とよなか国際交流協会には、多文化な背景をもつ若者たちが、子どもたちのために何かしたいと集まり、協会の子ども母語教室や学習支援サンプレイスなどでボランティアをしている。彼ら・彼女らは、日本生まれや子ども時代に来日した、多文化な背景をもつ「もと子ども」で、自分の経験や思いが子どもたちの力になればと子どもたちに寄り添った活動をしている。彼ら・彼女らとともに、潜在化する多文化な子どもたちがつながり、生き生きと活躍できるようなプロジェクトを企画・実施した。

(2)目的

多文化な子どもたちがその背景を豊かなものとして積極的に捉え、それを生かし、学校や地域で活躍できるような環境づくりを、教育委員会や学校との連携のもと進める。

(3)内容

◆子どもまちとは？

「子どもまち」は、ドイツ・ミュンヘンで 20 数年前に生まれた「ミニ・ミュンヘン」がはじまり。「ミニ・ミュンヘン」は 8 月の 3 週間だけ存在し、7 歳から 15 歳の子どもたちだけで運営されている。日本でも「ミニさくら」（佐倉市）「ミニ大阪」（大阪市）「ミニ京都」（京都市）など 40 ヶ所以上で取り組まれている。子どもたちが住みたいまちのイメージをもとに必要な仕事（銀行・市役所・レストランなど）を考え、実際にまちをつくりあげていく。自分のしたい仕事を見つけ、働けば、オリジナルの通貨の給料が手に入り、それをまちのなかで使うことができる。子ども自治、子どもの参画、まちづくり、地域通貨、キャリア教育などの面で注目を集めている取り組みである。

◆「たぶんかミニとよなか」に取り組むわけ

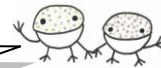
協会でボランティアをする大学生たちは、子どもたちと自分たちの課題を以下のように挙げた。

- ・母語教室や学習支援にやって来る子どもたちの横のつながりが無い。
- ・居場所づくり、子どもたちに寄り添うことを大事にしているが、子どもたちが何をしたいと思っているのか、子どもたちの声を聴けていない。
- ・つい最近まで自分がサポートされる「子ども」だったので、立場が変わってどのようにしたらいいかわからない。
- ・自分が子どもだった頃に多文化に触れる機会がもっとあったらよかったと、今になって思う。

子どもたちがつながり、子どもたちが主体的にかかわれる取り組みとして「子どもまち」に挑戦することを決めた。そこには、多文化な子どもたちが「まちづくり」の主体として未来を拓く力を養ってほしいという思いも含まれている。

◆「たぶんかミニとよなか」に向けて

こんにちは！コモとスースです。とよなか国際交流協会のシンボルキャラクターです。



～研修とスタッフ会議～

参加人数：ボランティアのべ 57 人

	テーマ	内容
8/9	「多文化を表現するちから」金迅野さん(川崎ふれあい館)	大学生ボランティア身体ワークショップ(12人)
10/2	「子どもがつくる子どものまち」松浦真さん(子ども盆栽)	子どもまちを学ぶ・抱負と自分への約束(13人)
10・11月 土曜日	スタッフ会議(全9回) スタッフは全員で20人	1回2時間の子どもの会議の内容、目指すことを決める。当日に向けた準備など(のべ32人)

～子ども会議の内容～

参加人数：子どものべ 56 人、ボランティアのべ 50 人

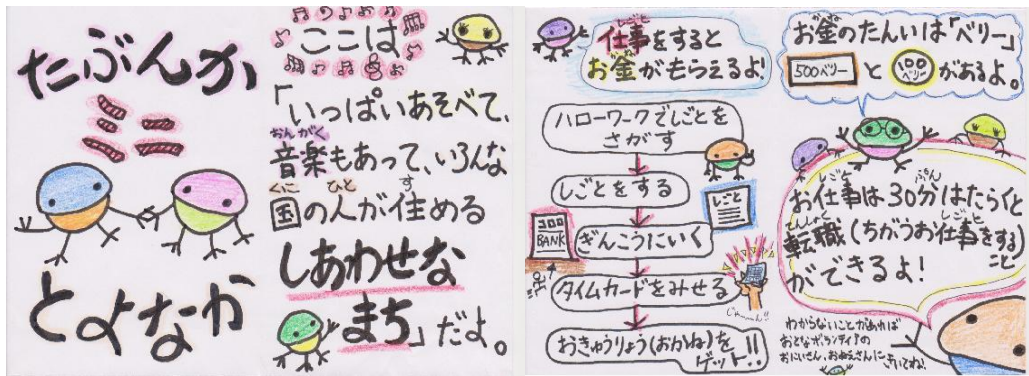
	テーマ	内容
第1回 (11/7)	みんなでまちのスローガンをつくろう (子ども10人)	みんなで意見を出し合い、話し合い、「いっぱいあそべて音楽もあっていろいろな国の人が住めるしあわせなまち」に決定
第2回 (11/14)	「たぶんかミニとよなか」にあつたらいいな と思う仕事を考えよう (子ども18人)	たくさん出たアイデアから、通訳、世界の料理屋、“国流”、病院、世界の遊び場、デザイナー、銀行、市役所などに絞られる
第3回 (11/21)	この仕事って、どんなことしてるんだろう (子ども13人)	どんな人に来てほしいか、何のための仕事かに子どもの発想が活きてくる。“国流”キャラクター「コモとスース」を作りたいとの声！
第4回 (11/28)	まちの貨幣をつくろう (子ども15人)	大議論の末、「コロロ銀行」が発行する「ベリー」に決定

◆「たぶんかミニとよなか」当日

参加人数：子どものべ 60 人、大人のべ 120 人

12月5日(日)第6回多文化フェスティバルの中で実施した(とよなか国際交流協会、豊中市国際教育推進協議会主催)多文化フェスティバルは、帰国児童生徒、在日コリアン児童生徒、渡日児童生徒など、国際に関わる子どもやその保護者、国際教育に関心のある先生が、一同に集い、つながり、交流を深める機会として開催されている。

	プログラム	内容
10:00 ～16:00	子どもプログラム：たぶんかミニとよなか	最初存在しなかった「まち」が、子どもたちの発想と働きで、じょじょに形になっていく。
①10～12 ②13～15	大人プログラム：①「異文化と出会うとは 沖縄、東京、そしてベトナム」善元幸夫さん(立教大学非常勤) ②「インターナショナルカフェ」(国際教育推進協議会)	子どもがまちをつくっている間、大人は大人の学び&リラックスタイムを。お昼は、ネパールの人たちによるネパール料理のランチ販売をおこなった。



(4) 工夫した点

- ・学生ボランティアは子どもの意見を尊重し、子ども自らが内容を決定していくプロセスを見守ることを心がけた。
- ・当日のみの参加でも楽しめるように、また参加した子どもが「子どもまち」のしくみやルールを理解できるように工夫をした。

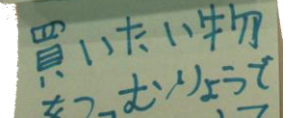
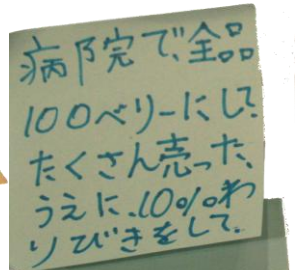
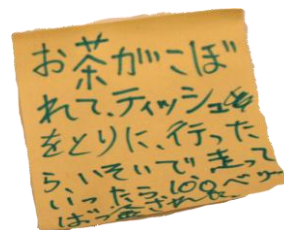
(5) 苦労した点

- ・初めての試みだったので、学生ボランティアが子どものまちづくりのイメージをつかむまでに時間がかかった。
- ・子ども会議の進め方や子どもへの関わり方などで難しく感じるがあった。しかし、何度もスタッフ会議を開き、子どもたちの気持ちとスピードに寄り添ったプログラムに創り上げていった。
- ・アルバイトや就職活動などで、学生ボランティアが継続的に関われないがあった。
- ・国際交流センターとつながっていない子どもたちにどのように「たぶんかミニとよなか」のことを知ってもらうかに苦労した。情報発信や学校との連携が重要だと認識した。

(6) 成果

◆参加した子どもの感想

- 「色んな人とあえて、友だちになれた」
- 「めちゃめちゃ楽しかった！(>v<)」
- 「〇〇ちゃんと友だちになれて、うれしかった。〇〇ちゃんのこと大スキです！また遊ぶぞ」
- 「またやりてーあーおもしろ END」
- 「もうすこしでどろぼうにされました」
- 「おともだちがいっぱいできました」
- 「世界の人々と楽しく交流できて楽しかった」
- 「お茶がこぼれて、ティッシュをとりに、行ったら、いそいで走っていったら、100ベリーばっ金された！」
- 「今度はいつやるんですか？ 交番は楽しかった」
- 「自分が作ったみさんが売れてうれしかった」
- 「たくさんの人とふれあえて、めっちゃ楽しかったです★」



◆多文化フェスティバル「たぶんかミニとよなか」 報告冊子(全 18 頁オールカラー)

1. とよなか国際交流協会 子ども事業の取り組み
2. たぶんかミニとよなかって？
3. 子ども会議
4. たぶんかミニとよなか本番
5. 子どもたちの感想
6. 学生スタッフの感想
7. おわりに



◆大学生スタッフの感想 (2011 年度全国在日外国人教育集会・奈良大会での報告より一部抜粋)

「居場所に大事なのは安心できる人間関係」 たぶんかミニとよなかりーダー 金和永

～(省略)～また子どもたちは、私が思っていた以上に、自分について積極的に伝えようとしていた。ルーツを持つ子どもたちが自分を発信するということは、簡単なことではない。子どもたちは、日々学校などで何かしら自分を抑えなければならない場面に出くわしたり、周りとは違う自分に、漠然とした違和感を持ちながら過ごしている。しかし、センターに集まってくる子どもたちは自分の考えや自分のことをどんどん発信しようとする。その時まだ私は子ども会議での子どもたちしか見たことがなく、普段の活動での子どもたちがどんな表情をしているのかはわからなかったが、子どもたちの自分を表明しようとする気迫は、子ども会議の度に、前に立っている私にぐいぐいと迫ってきた。料理のメニューを決めるときに、しきりに自分のルーツであるブラジルの料理を推す子や、前に住んでいたオーストラリアのまちのイメージを地図にして、まちづくりの参考にと自分から持ってきてくれた子もいた。



～(省略)～あるフィリピンにルーツを持つ小学3年生の女の子は、「たぶんかミニとよなか」を終えて、もう一度やりたいというだけにとどまらず自分で「タガル語教室」(よくタガログ語と書かれるが、本人は、お母さんの発音は「タガル」と聞こえるのだと言って譲らない。)を立ち上げた。この前も教室の一貫として、バンブーダンスを張り切っていた。今は協会子ども職員として、自分のロッカーまでもらって、毎週土曜日と日曜日の9時から5時まで協会でも過ごしているほどだ。自分のルーツに関わることを、このような形で一つの「教室」として、自分がリーダーとなって発信していこうという試みのなかには、「たぶんかミニとよなか」での経験が活かしているのではないだろうか。

「子どもたちをつなげたい ～わたしたちにできることはきっかけをつくること～」 コーディネーター 焦春柳

～(省略)～こうして一回一回の会議で作りあげたものがついに本番を迎える日がやってきた。大学生による前日準備にも子どもが来てくれて、手伝ってくれた。本番は、開始時間より1時間ほど前からたくさんの子が集まっていた。準備をしていると「まだ？早くー」と早くしたいアピールをしていた。ミニとよなかが始まると一気にみんな会場に入って行って自分のやりたい職業に直行していた。初めから決めていた子もいれば、その場で決めていた子もいた。みんな自分の職場につくと看板を作ったり、仕事をしたりしていた。全体をみているとそれぞれに個性のある仕事をして、みんな笑顔になっていた。楽しんでいただけ、働くことについても意識していた。「あと、何分がんばっ



たら給料がもらえるの？」と質問を何人からも受けた。仕事は楽しいけど疲れるねという子もいた。働くことに楽しいこともしんどいこともあることを自分の体で感じてくれたのではないかなと思った。そんな「たぶんかミニとよなか」は、大人も子どももみんなが笑顔になれたまちだったと思う。

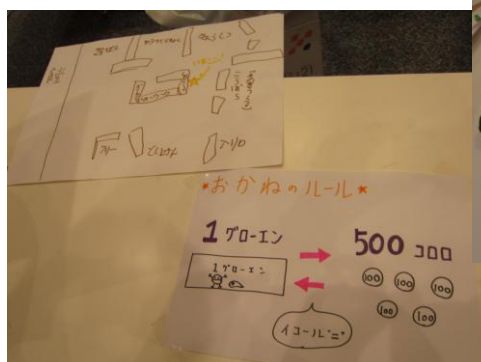
ミニとよなかに私たちが想像していたのよりも多くの子どもがきてくれた。期待以上の子どもまちになったと思う。何より子どもの感想と態度が頑張ってるって良かったと思わせてくれた。「めっちゃ楽しかった。次はいつやるの？今度はもっといっぱいしたい」などいっぱい感想を言ってくれた。

ミニとよなが終わり、子どもたちはいつもの活動に戻って、前より明るくなった気がした。それは一個の楽しみが増えたように見えた。勉強もいいけど、たまにはこういう気分転換も必要だなと思った。楽しみがあると頑張る力にもなると思う。

◆子どもたちの熱い要望にこたえて2011年度も開催（2011年11月27日開催）

参加人数：のべ 210人

子どもたちの「ミニとよなか、いつするん？」「次もしたい」という声に後押しされ、2011年も開催することになった。昨年度参加した子どもは1回目の子ども会議からアイデアを持ち込み、スタッフ会議にもくわわったりと、やる気がみなぎっていた。今年は子どもたちの話し合い、対話の場を大事にしようとしてスタッフで決める。子どもたちが決めたまちのスローガンは、「自由なまち、笑顔のあるまち、歴史のあるまち、遊べるまち、夢がかなうまち」。お金の単位は、グローエンとコロロ。



(7) 今後の課題

- ・地域での取り組みにとどまらず、学校内にも多文化な子どもたちの活躍の場が生まれることを期待したい。そのためにも、こうした取り組みを広く発信していくことや、学校や教育委員会との連携が重要である。
- ・「たぶんかミニとよなか」は一年に一度の取り組みであるため、たとえば、日常的に居場所を求めている子どもや学習支援が必要な子どもたちのように、課題を抱える子どもたちが協会事業につながるように働きかけていく必要がある。
- ・何より地道な取り組みを続けていく。

